

幸田露伴 雲の影 (新仮名遣い版)

誰でも一度遭遇した事の有る人は能く知っている事である。小高い山から広い野を見て居たり、又小高い断崖の上から海面を見て居たりすると、能くはつきりとわかるが、大きな雲の影が、丁度青い天を其の雲が行くのと同様に、其の野の中や海の面を這い歩いて行くことがある。天氣が然まで悪くない折でも然様いう時は即ち日が当ったり陰ったりするので、余り多くは使われない語ではあるが、俗に其の事を「日がえりがする」という。

其の日がえりがするのは、何でも無い、ただ雲の影が為せるに過ぎないのだから、大きな雲にしる細長い雲にしる、其の雲さえ過ぎて仕舞えば日は相変わらず照るのである。いや、此地は其の雲の影の中に入って居て陰って居るにしても一寸でも其の雲の影をはずれて居るところでは鮮やかに日が当って居るのである。だから其の暗い陰の中に入って居るところは、野や海の全体から云えば真の一小部分に過ぎぬのである。然し眼を遮る物の無い野や海を見て居る場合で無くて、家ごみの市中―天が引窓から四角に見えたり、路次の上に細長く見えたりするようなところに居ると、日がえりして我が居るところが曇った時に、それを一小部分と考えることは出来難いもので、全体に曇って来たのだと信じて仕舞う。隣家の人も向いの家の人も皆一緒に同じ影に入って仕舞うので、皆一緒に其の雲が与える同じ感想に支配されて仕舞って、甲乙丙丁、六兵衛も七兵衛も同じ薄っ暗い暗さを味わうのである。で、三十分か四十分の後には何様いう様になるという事などは全然想像し無いで、ただ目前頭上だけの暗さを全体の天氣が斯様でも有るかのようには知らず識らず認定して仕舞い勝なものである。斯様いう影の一部分から云えば間違いで無いようだが大局から云えば間違って居ることを、古くから「同分妄見」と云って居る。

「丙午の歳は災厄が多い」という迷信が支那日本にはある。この迷信は一の暗雲である。遠方から此の迷信の雲が歩いて行くところを見て、そして其の雲の下に当って居るところの人民が、その雲の与える薄っ暗さを味わって、いろいろのことを思ったり為たりして居るところを見たらば、実は一場の滑稽に過ぎないであろう。併し其の雲の下のところ当って居る地の人は、甲、乙、丙、丁、乃至六兵衛・七兵衛、八兵衛、九兵衛、誰も彼も其の雲の影を被らずには居ない。支那日本では智者愚者悉皆、多少疑惧の念を懐いて居ぬものは無い。で、相応に知識の有るものでも、また其様な俗説に動かないものでも「丙午の歳に女の児が生れては」などと思つたのは、日本の昨年の實在の事実では無いか。ところが、此の迷信の雲の下に当って居ない西洋諸国の人民は、火山破裂だの大地の激震だのという恐怖すべき事件が実際に起つたにもかかわらず、惴々焉として丙午の歳を懼れて居る日本人民のように無益な心配を仕ては居無かつたようである。理屈を云えば丙午の歳はどここの国でも丙午の歳であろう。怖るべきが至当なら何国でも怖るべきであって、怖るべからざるが至当ならば何国でも怖るべからざ

るわけであるから、何れかが間違つて居ねばならぬので、勿論それは世界の中に僅か二カ国ばかりの人民の感じが間違つて居つて、其の他の諸国の人民の、丙午を怖れも何もせぬのが間違つていたのでは無い事は明らかである。けれども日本だけで多数決を取つたらば、丙午怖るべしという考えの方が実際に於てはあるいは是と認められたかも知れない。同分妄見は正見に似て居て侮ることの出来無い威力のあるものだ。然し、妄見は何所までも妄見に相違ない。

宗教の歴史を見ても、政治の歴史を見ても、経済の歴史を見ても、さて何の歴史を見ても、同分の妄見が正見らしく威張っている事が稀では無い。狐が尊ばれている地がある、犬神が恐れられている地がある、偶像が信じられて居た時がある、経典は批評すべき者で無いとされて居た時がある。何れも皆其の時では、事実らしく道理らしく一般の人から認められて居た同分の妄見である。政治上にも経済上にも種々の同様の跡は認められる。文学上にも矢張り同一の事実があるようである。いや確かに左様いう事実があった事がある。時代が違つたり場所が違つたりするところの者から見れば、一苦笑にも価しない下らない事にも、其の時代の者、その境界の者は泣いたり笑つたりして大騒ぎをやって居た事がある。即ち所謂「時代の塵埃」を挙げて騒いで居た事実がある。譬えば和歌で云えば、定家以後徳川氏に至つても猶其の力を残して居た長い間の、形式のみ有つて精神の無い「形式主義」の行われて居た間の如き、俳諧で云えば「談林風」の行われた一時なんぞが其である。足利氏時代の和歌を異時代の今から見れば、何が面白くて彼の様なものを作つて居たろうとは誰の胸にも浮ばずには居ぬけれども、其の時代は其の時代でいろいろと骨も折つたり賞賛も仕たりして互に励み合い面白がり合つて居たのであろう、立派に其時代の人同士では点頭き合つて居たのであろう。然し時代が離れ距たつて見ると、我々は其の時代を蔽つて居た雲の下には居ないから、一向に其の雲の薄つ暗い影が与える処のものを味わひはせぬ。随つて感心もせず、点頭もしない。そして直ちに其の時代の人が形式主義の「同分妄見」に落在して居たのを認めて、「ああ彼の時代だつて才のある人が無かつては無かろうが、惜しい事に時代を蓋つて居た偏狭な形式主義の氷の為に其の歌の若草は萌えずに終わつたのであろうか」と思わずには居られない。それと丁度反対に是非形式的でこそあれ、蕉風未だ起らずして貞門の威が既に墜ちて居た時代に、野火枯草を燎くの勢いで行われた談林風の俳諧なぞも、やはり歲月の隔つた今日から見れば実に変なもので、真面目には何とも評しようが無い位である。然し当時の人は皆同じ「通り雲」の下に居て、皆同じ其の影を浴びて居たので、其の連中では我から面白がつて興じたばかりで無く、各自で惨憺と苦心したり、互に賞讃し合つたりして居たのである。漢詩も明の末の陰仄から奇なりとしていた頃などは、何様も慥に変な雲の影が一時を蔽つて居たのであろう。

和歌漢詩は姑らく措いて、手近な例を俳句に取つて、試みに割り口説を仕て見よう。芭蕉以前、いや芭蕉がまだ正見の眼を見開かなかつた前の頃の状態というものは、其の当時の暗雲の

下に居た人同士に言わせたなら理屈も有ったものでは有ろうが、時代が距たつて居る今日の我等から見れば、実に変なものであった。たとえば、

千代を経る天のてんつる霰酒あられ

霰あられやは芥子は牛蒡は埋れ木の

麩あられというものあり性水を好んで氷に遊ぶ

山吹の露菜の花の唧ち顔なるや

氷筋の如しかんてんのかんは寒いとよむ

というが如き句は、今の者が卒然として之に臨めば、句としては受取らぬ程のものである。其の意味が第一に何であるかも不明である、其の趣味がまた何処に在るのだから不可得である。その技巧がまた何処に在るのか合点が行かぬ。詰り食べ物で無いものを口に入れた時に、何様味わつて何と云つて評価すべきか知らぬが如く、ただアツと云わせられるに過ぎぬような感じがするであろう。然し、其の当時の人、即ち其の様な句を作った人や、其のような句を、成程是は面白い可笑いおかしなどと受け取った人にして見れば、丸つきり意味も分からぬ、趣味も感じられぬ、技巧も認められぬというのでは無くて、必ず欺かぬ感じや、少なからぬ興があつて、そして作る人は作り、聞く人は聞いて居たに違い無い。即ちそれが同水異観の道理で、今日の我々には寢言の様に聞えるにも関わらず、当時の人にはまさか寢言には聞え無かつたのであろう。いや寢言に聞こえぬどころでは無い、苦心して額に青筋を張らせたり、眉頭に八の字を刻んだりして、そして、寒天の寒は寒いと読む、アア面白く出来た、などと悦んで居たのであろう。でも、是が一人か二人で此の様な句を呻つて居たのならば、如何に昔時とはいえ狂人沙汰に扱われるであらうが、そこが彼の「通り雲」の影を一同で浴びれば一同は同じ感じを持つ道理で、時代の風潮で其様な事が流行れば、誰も彼もが矢張り、天のてんつると云つた風な事を悦んで真似る為に、狂人らしく見えぬどころでは無い、却つて面白がりきつて居たに違い無い。向榮庵から談林の風が吹き出してから幾年という間というものは、古臭い貞門の流れを汲んで死水に漱ぐような愚を守っていた一部の人を除いては、皆滔々として此の様な変な句を作つて居たので、そして互に「俳句は応に是の如くを作るべし」位に思つて居たらしい。それが一時の妄見であつたか永久の正見で有つたかは擱おいて、兎に角世を蓋うて居た流行であつた事は争うべからざる事で、宗因門下の松意や高政や西鶴や常矩などは申すに及ばず、芭蕉であれ白石であれ素堂であれ杉風であれ、皆一時は同じ通り雲の影の下に立つたので、一緒になつて変な真似をして居た。その中で頑固に抵抗

したのは儼かび臭い保守党の随流ぐらいの者で、これまた守株膠柱しゅしゅこうちゅうの見識より外に何も無い化石的頭脳を有して居た一輩であるから論にも及ばないのであった。されば、談林風は天下を席卷して、其の奇異放縦を以て貞徳以来の底にこびり付いて居た旧渣滓さしを傾け覆して捨てて仕舞った功も有ったが、兎に角一時の作者と世俗とをして変挺な真似をさせて、而して後世の者をして「何で此様な寝言こんのようなものが数年の間行われたであろう」と訝いぶかり疑わせるような跡を残した。

併しかし談林風だからと云って全然意味も趣味も解らない句ばかり作ったのでは無い。才は才、傾向は傾向であるから、其様な変な傾向の中でも、才人の句はやはり面白い響や香をさせて残って居るのである。ただし其も唯一人宗因ぐらいの事で、其の他は松意にもせよ西鶴にもせよ、当時―即ち其の通り雲の影が世の中を蔽って居た時ほどには、他の時代―即ちその雲の影が無くなった時代には尊重渴仰され無い。いや尊重渴仰され無いどころでは無い、却て詰らぬ事でも仕て居たかのように酷議される傾きもある。まして名も無き末派の作に至っては、今此処に掲ぐるが早きか哄笑虐罵の中に葬り去るるは已むを得ざるの運命である。

談林風の起ったのは、余りに貞門の俳諧が千篇一律で、ただ腐気有って活気無く、面白くも何とも無いところから、それと離れよう離れようという希望の火が噴き出したのだと云っても宜いと思われる。そこで、貞門はおとなしい、談林は荒れる、貞門は句の姿を優しく調える、談林は異様に気取って作る、貞門は和歌に本づきたがる。談林は漢詩を踏まえたがる、貞門は古く上たつとびたがる、談林は新しみを尚たつとんで下卑になっても嫌わぬ、貞門はやや道学的で彝倫いりりんを重んじる敦厚主義、談林は写实的で斟酌のない芸術主義、という調子で万事が反対を行っている。だから上手な人の句はよいが、下手な人の句になると、当時は容易に分かったであろうが、今では余程考えないと分からないような悪い気取り方をしたものが多い。無理やりに何でも彼でもと、形式及び思想の上に新しみを出したがった弊として、形の上からは謎のようになつたり、片言のようになつたり、散文的になつたり、想の上からは非詩的になつたりするような傾きを生ずるに至つたので、其等が後の俳人の軽蔑嘲笑を致す大原因となつた事は明白な事実である。けれども此の談林の大胆な破壊が、後の蕉風俳諧の播種発芽の為の鋤すきくわ鋤となつたのである事も、また明白な事実である。即ち宗因以下の談林の徒は貞徳以来の俳諧の破壊の作用を遂げたので、其の破壊が有つたればこそ、芭蕉が徳川時代を飾るに足りた俳句の一道を成し得たのである。宗因出でずんば我等猶古いにしえのままならんを、と芭

蕉が言ったのは実に平正至公な論である。

談林調の行われたのは其様な状況での一時の現象で、ほんの暫くの雲影が地を蔽ったに過ぎなかったのである。で、同じ談林畠の中でも眼の明いたものは、是が一時の流行であろうか長引くべきもので有ろうか位は、やがて明らかに解かったものと見える。狐に誑かされたような事を然様々々何時までも言って居て面白い理屈の無いのは、考えて見れば誰にも知れて居るので、数年の後には何様も談林派の人々自身がやがて振るわなくなったようである。西鶴は好色本の方に力を入れ出して、そして其の為に西鶴の名を伝えたが、若し西鶴が俳諧のみを守って居たならば、蓋し松意や常矩と相去ること遠からざる位地を俳諧史上に得るに止まったことであろう。さて又芭蕉は一度は自分も談林調を試みて、矢張り雲の下に居たが、忽ちにして談林の異調の変挺なものが一時の流行で、通り雲の瞬時の陰影に過ぎざることを悟って、そして貞門の古にあらざる談林の異でもない、人為に因らずして自然に基づく詩歌の真源泉を探り得たるところから、終に蕉風の俳諧を起し、宗鑑守武以来諧謹の一口業たりし俳諧なるものを、詩歌と併列して愧じざる一体の短詩として、徳川時代の文学史上に建立する大功を成したのである。奇巧を形体に求めて、苦しんで異様難解なものを作っていた談林派の所行の誤謬であり徒勞であることを悟って、敢えて俗談平話を嫌わず詩美を其の求むべきところに対して、貞門の陋、談林の痴を一時に放下したところは実に芭蕉である。芭蕉門の龍象もまた其の年齢に於て芭蕉と遠からざるものは、何れも大抵一度は談林調を試みたものであるが、芭蕉の所為に倣って談林の悪気取り捨て、すらりとした蟠り気の無い句の姿を取って、只管真詩美を句中に包含掬取しようとし心掛けたのは、実に敬服に余りある事で、そして其等の諸氏をして不朽の名を成さしめたる所以である。然らずんば談林の末輩同様に矢張り「時代の塵埃」として、後世からは鼻の先であしらわれるに過ぎなかったであろう。

こう云えば談林連中は皆下らない事ばかりを敢てして居たようであるが、何様して何様して中々左様では無い。皆一生懸命に真面目に励んで居たもので、ただ憾むらくは眼が低く才足らずであったため、変挺なところへ首を突っ込んで無駄もがきをしたに過ぎないのだから、嘲笑すべきでは無い。むしろ同情すべきものである。松意が「幕づくし」に、「かなわぬ力をはげみ、岩を起こし枯木をたゞき」といってあるのは実に本音で、嘘でも何でも無いのであろう。然様してまた松意あたりになると、流石に末輩のようにただ無暗に珍奇な事を

云い散らしさえすれば宜いというような事も考えては居ないので、其の十百韻の序に、「凡市中に多年よしと思へる古くさきものと今また新し過ぎて一句の立たざる二つの悪を見れば水火の二河たり、中に四寸の白道あり。此白道のあかりをはしらむとのみ立る処談林の法なり」と云っているのは、明らかに其狙い処が必ずしも不当なもので無い事を現わして居る。又其跋に、「新し過ぎたるは其の過ぎたる所を削り捨てれば可也、古朽ちて昔の蒸したるは削るに便なし」と云ったり、又「凡世上の俳諧を悪くするは古巧者のわざなり」と霜刀一揮の勇を奮ったりして居るところは、皆云い得て過たずである。其の狙ったところが必らずしも悪くないどころでは無い、いかにも正鵠を得ていて、そして凜然と意気張った様子は可愛らしい位である。然し鉄砲の狙いが能く著いたからと云って屹度禽が取れるものでは無い。要は引き金の引き工合にあるので、談林一派の者等は宗因一人を除いては何様も余り立派な禽を数多くは獲ずに終ったという残念な始末である。で、後世からは、「何を当てずっぽうに無駄弾を放って居たのだろう、何方を向いて何様禽を撃とうと思つて、まあアンナ変挺な眼つきを仕たり手つきを仕たりして居たのだろう」と云われるような訳に立至ったので、実際は憐れむべく悼むべきである。

良い方の方面で云えばワイワイル、悪い方の方面で云えば魔がさすというような事で、「鴨の共立ち」同様に、人間の心理作用にも妙に「連れる」という事がある。酒客連中の大一座に、一人が不図狐に憑かれた真似をして戯れると、他の者もまた洒落て狐に憑かれた真似をする。末には誰も彼もが狐に憑かれた真似をして、競つて馬鹿な事を仕合つて互に面白がつて笑い興じて居る。すると其の間では、甲が茶台を冠ったり、乙が床の間に上つて地藏の真似をしたり、丙が肴を供えて拝んだり、丁が裸脱ぎになつて泳ぐ真似をして隣りの人に縋りついたり、戊が立膝をして馬に騎つて居る真似をしたり仕て居る其等の意味が悉く分つて打興じて居る、其処へ遅れ馳せに一人参会して、一円合点が行かぬので呆れ果てて「是は何だ」と詰つて云うと、多勢が大いに怒つて、此様な分らない奴は無いと云つて袋叩きにしたと云う喩がある。時代の雲の陰、即ち同因同縁同境の者の同じ妄見を有している同士では、人が分らぬ筈の事も能く分つて、そして其の面白味も亦能く解る事、たとえば其の喩話の酒客同士の様なものである。で、談林仲間では、「椎と書れたり代々柑子しだゆづり葉」「玉子の国すかすに清し日の始」「大根生れ逆なるがをかしいとや」「夜窃に虫は月下の栗を穿つ」「世にあへり潮干のけふの土龍」「轆轤首幕に影なし花に咲」なんぞい

う、分るような分らぬような、無理な、非常識な、木くらげや靈芝れいしを天婦羅にしたり、焼ケ木杭ぼっくいに豆粉を掛けて出したというような、味わう事も吞込むことも出来兼ねるものを、互に面白がって作り合い受取り合って居たものと見える。其の雲が過ぎ、其の時代が過ぎた後から云えば、実に妙なものはあるが、何も時々で、不思議でも何でも無い。

松意が「新し過ぎて一句の立たざる」と云っているのは実に不問語とわずがたりの真実で、鬼貫おにつらが独り言に、「聞えぬという句に幽玄と不首尾の差別あり、まことを弁えない人の、様々に句を作りて、是にてもまだ聞え兼ねて面白からじ、とひたぬきに詞ぬきて、後には何の事とも聞えぬ句に成り侍れど、作者は初一念の趣向を心に忘れ侍らねば我のみ独り聞ゆるに任せて云い広むるも片腹痛し」と云って居るのも、能く其の覆轍を見て道破して居るのである。詞をぬくのみでは無い、「たゞでは面白く無いと捻ひねる」ところからも訳が分からなくなるので、作者一人は種を知っている、他人は知らない。そこで「一人者のごっくり飲み」という格で、なるほど自分には酒の味も分ろうが、その話をされた人には分らない訳になるのである。

久雨漸く霽はれんとする時や、暗天漸く雨ふらんとする時などは、得て「日がえり」のものである。時代の潮流が漸く変る時にはややもすれば、後世から見では解釈の出来ぬような変なものが行われる事がある。詩でも歌でも他の美術でも左様そようである。然し雲はやがて去るものである。片雲の与える影の下が世界の全体では無い。雲来って万山動き、雲去って山一色である。

(明治四十年四月)